

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

間接受身文における与格名詞句の統語的性質について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星, 英仁, Hoshi, Hidehito メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1189

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



間接受身文における与格名詞句の統語的性質について*

星 英仁

1. はじめに

日本語の主な統語的特徴として、(i) 基本語順が SOV である、(ii) 語形成において膠着的特徴を持つ、(iii) かきまぜ規則 (Scrambling) の適用により比較的語順が自由である、(iv) コンテキストに応じて名詞句を省略することが可能である (*Pro-drop*)、などを挙げることができるが、日本語の統語構造を判断する場合、英語などのような屈折的特徴を持つインド・ヨーロッパ語族に属する言語に比べて、これらの特徴により構造の同定が困難であることが多い。例えば、ある要素の語順が比較的自由である場合、それがかきまぜ規則の適用により生成されたものなのか、句構造のスキーマに基づいて基底生成されたものなのか明らかにしなければならない。また、ある統語的機能を担う要素が他の要素と接合され、音韻的には1つの要素として機能している場合、統語的にも1つの要素として扱うべきなのか、それとも独立した要素なのか検証しなければならない。さらに、ある名詞句が省略されている場合、それが空範疇として存在しているのか、削除変換などの統語規則が適用された結果として表層の構造が得られたのか、あるいは元々何も存在していないのか、などいくつかの可能性を検討する必要がある。このような日本語の統語的性質を踏まえた上で、本論文の目的は、生成文法の枠組みにおける日本語統語論研究の中で、これまで議論されてきた受身文、特に間接受身文に焦点を当て、今まで仮定されてきた間接受身文の統語構造がどれだけ妥当であるか吟味することにある。間接受身文における与格名詞句は Hoshi (1999) が主張するように埋め込み節に属しているのか、それとも Kuroda (1978) や柴谷 (1978) で示唆されているように主節の要素になっているのかという統語上の問題を取り上げ、これまでおこなわれてきた議論を概観し、新たな言語事実に基づいてさらなる経験的議論を展開する。さらに、本論文で得られた結論が現段階で提案されている生成文法理論の枠組み、すなわち極小主義プログラム (Chomsky

* 本稿は筆者による準備中の論文 "Control or Movement: On the status of *ni*-phrases in the Japanese indirect passive" の一部を日本語に書き下ろしたものである。本稿を執筆するにあたり、神戸市外国語大学の那須紀夫氏から貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。尚、本稿に見られる不備は全て筆者の責任によるものである。本稿の執筆準備段階において、2003年度同志社大学学術奨励研究 (研究課題: 「格素性と自由語順現象の研究」) による研究費の一部助成を受けている。

1995を参照)においてどのような理論的意味合いを持つのか、簡単にではあるが考察をおこなう。

2. 間接受身文

まずは、以下の文を例にとって、直接受身文と対比しながら、間接受身文の性質について考えてみたい。

- (1) a. 次郎が花子をいじめた (他動詞能動文)
 b. 花子が次郎にいじめられた (直接受身文)
- (2) a. [雨が降る] (自動詞能動文)
 b. 太郎が [雨に降られた] (間接受身文)
- (3) a. [次郎が花子をいじめた] (他動詞能動文)
 b. 太郎が [次郎に花子をいじめられた] (間接受身文)

(1b) のように、対応する能動文の目的語が『主語』(主格「が」を付与された名詞句)に格上げされ、直接動作の影響を被る受身文を直接受身文とよぶ。¹ 直接受身文には必ず意味的に対応する能動文が存在し、したがって (1a-b) は同一の知的意味を持つ。どのような視点からその出来事を記述するのかに応じて、能動文を使用するのか受身文を使用するのか、その選択に違いが生じる。他方、対応する能動文が存在せず、(2b) や (3b) に見られるように、自動詞や他動詞に受身形態素「(ら)れ」を接合し、受動化された出来事 (= Event) が表層の『主語』に影響を与える受身文を間接受身文とよぶ。間接受身文では、受動化された出来事において能動文の主語に対応する名詞句に与格が付与されているが、同じ意味役割をそのまま保持している。(2b) では、能動文の動詞「降る」の主語に対応する名詞句「雨」に与格が与えられているが、意味役割は能動文と同じ『主題』である。同様に、(3b) でも「いじめる」の主語に対応する名詞句「次郎」に与格が与えられているが、意味役割は (3a) の能動文と同じ『動作者』である。さらに、

¹ 直接受身文の主語位置は非 θ 位置で、NP移動によって主語位置が占められているのか、あるいは θ 位置で、基底生成によって主語位置が占められているのかという問題は受身文の『統一理論 (Uniform theory)』及び『非統一理論 (Non-uniform theory)』に関わる問題でもあり、ここでは扱わない。関連する議論に関しては、Hoshi 1999、Howard and Niyekawa-Howard 1976、Kitagawa and Kuroda 1992、Kuno 1973、Kuroda 1965、1979、Miyagawa 1989、柴谷1978、Washio 1990を参照されたい。

間接受身文では、表層の主語は「(ら)れ」により下位範疇されており、項の数が対応する能動文に比べて1つ増えていることになる。すなわち、表層の『主語』は何らかの意味役割を担っていると考えることができる。以上の事実から、間接受身文の意味・概念構造は概ね(4)のような表示を持つと仮定できる。影響を受ける名詞句を Affectee NP (= AN)、影響を与える出来事を Affector Event (= AE) とよぶことにする。

(4) 間接受身文の意味・概念構造

[命題 Affectee NP が [Affector Event NPに (NPを) V] - (ら)れ]

(2b) においてAEは「雨に降る」であり、ANである「太郎」にその影響が及んでいるが、この影響が『間接的』であることに注意したい。例えば、(2b)は雨が降ったことにより、太郎は足止めをくってしまい、出かけることができなくなってしまった、というコンテキストで用いることが可能であり、雨が直接太郎に降りかかるという状況が常に成り立っていないといけないというわけではない。

(3b) においては、AEが「次郎に花子をいじめる」であり、その出来事によって影響を受けるANが「太郎」になっている。ここでも、その影響は間接的であり、太郎が次郎から直接いじめを受けたということではなく、次郎が花子をいじめたことにより、何らかの形で花子と結びつきのある太郎が被害・迷惑を被ったという解釈になっている。このように、間接受身文においては、表層の主語が被害・迷惑などの『経験者』としての意味役割を担うことから、間接受身文を『被害(迷惑)受身 (adversative passive)』とよぶことがある。しかしながら、(4)で示された言語形式が必ずしも被害や迷惑として解釈されるわけではないという事実から、ここでは一貫して『間接受身文 (indirect passive)』と言及しておくことにする。²

それでは、間接受身文の統語構造は(4)の意味・概念構造とどのように結びついているのだろうか。統語構造は計算システムにおいて階層的に生成されるという事実に基づいて考えてみると、統語構造の可能性が少なくとも4つ存在することになる。ここでは、他動詞(Vt)を用いた間接受身文を例にとって考えてみる。

² 例えば(i)の例において、被害や迷惑の解釈は含まれないように思われる。

(i) 太郎は指導教官に日頃の努力を認められた

- (5) a. [_s NP が [_s NP に NP を V_i] - (ら) れ]
 b. [_s NP が NP に₁ [_s t₁ NP を V_i] - (ら) れ]
 c. [_s NP が NP に₁ [_s PRO₁ NP を V_i] - (ら) れ]
 d. [_s NP が NP に₁ [_s pro₁ NP を V_i] - (ら) れ]

(5) では共通して、受身形態素の「(ら) れ」が2つの項を選択する述語(動詞)とみなされており、主格を付与されたNPと不定節S(又はTP)を下位範疇する複文構造になっている。³ しかしながら、与格名詞句「NPに」の統語的位置と不定節Sの構成要素の扱い方に違いが見られる。(5a)では与格名詞句が埋め込み節の主語位置に留まり、その位置で与格を付与されており、(4)の意味・概念構造にそのまま対応している(Hoshi 1999)。便宜上、これを『埋め込み節分析』とよぶことにする。(5b)では、基底構造で埋め込み節の主語位置に生成されている名詞句が「に」繰り上げ操作(*ni*-Raising)の適用を受け、痕跡を残して埋め込み節の外側に移動し、その位置で与格を付与されている(Kuroda 1978)。これを『「に」繰り上げ分析』とよぶことにする。(5c)では、与格名詞句が埋め込み節の外側に基底生成され、埋め込み節の主語位置には[+pronominal]かつ[+anaphor]という統語素性が指定されている音形のない代名詞PROが生成されており、最も近い与格名詞句によってコントロールされている(柴谷1978を参照)。⁴ この分析を『コントロール分析』とよぶことにする。最後に(5d)では、PROの代わりに音形の無い、純粋な代名詞である*pro*(=[+pronominal]、[-anaphor])が埋め込み節の主語位置に生成され、与格名詞句と同じインデックスを共有し、同一指示の解釈を持つことを示している。この分析を『*pro*分析』とよぶことにする。以下では、様々な統語テストを用いて、この4つの可能性の中でどの分析が間接受身文の構造を説明するのに最も妥当なものであるのか議論していくことにする。

³ もちろん、もう1つの可能性として、Miyagawa (1989)で示唆されているように、埋め込み節を持たない間接受身文の構造を仮定することもできる。

(i) [_s NP が NP に NP を V-られ]

(i)では、受身形態素「られ」が動詞と接合しているが、格吸収(Case absorption)が起こらず、動詞が目的格を付与することによって、(i)のような表層の語列が得られると仮定されている。しかしながら、3.1で論じるように、照応表現の分布から埋め込み節の存在を仮定する必要が生じるため、単文構造の可能性は排除されなければならない。

⁴ 実際、柴谷(1978)は(5c)において、コントロールではなく、同一名詞句削除規則(Equi-NP deletion)が適用されていると論じている。詳細な議論に関しては、柴谷1978を参照されたい。

3. 間接受身文の統語構造

3.1. 照応表現の束縛

まず始めに、「自分」や「自分自身」という照応表現を用い、間接受身文において与格名詞句が主語としての機能を果たし、埋め込み文の構造が存在するというを示す。(6)と(7)の事実から、「自分」には主語指向の性質(=主語とのみ同一指示の解釈が得られる性質)があり、他方「自分自身」は主語指向性に加え、局所性(locality)を持ち、節を越えて同一指示の解釈を得ることができないということが指摘されている(Abe 1993, Katada 1991)。

- (6) a. 太郎₁が花子₂に自分_{1/*2}の部屋で告白した
 b. 太郎₁が花子₂に自分自身_{1/*2}の部屋で告白した

- (7) a. 太郎₁が[次郎₂が花子₃に自分_{1/2/*3}の部屋で告白したと]思っている
 b. 太郎₁が[次郎₂が花子₃に自分自身_{*1/2/*3}の部屋で告白したと]思っている

(6a-b)では主節の主語「太郎」が「自分」及び「自分自身」の先行詞として認可されるが、与格名詞句の「花子」は先行詞としてふるまうことができない。他方、埋め込み文を持つ(7)において、照応形が「自分」の場合、(7a)に見られるように、主節の主語「太郎」も埋め込み節の主語「次郎」も「自分」の先行詞として認可される。しかしながら、「自分自身」の場合、(7b)に見られるように、「自分自身」を含む最小の埋め込み節の主語である「次郎」は先行詞としてふるまうことができるが、節を飛び越えて、主節の主語「太郎」は「自分自身」の先行詞として解釈されることができない。これらの事実から、(8)のような一般化がなされている(Abe 1993, Katada 1991を参照)。

- (8) a. 「自分」は主語によって束縛されなければならない
 b. 「自分自身」は主語によって局所的に束縛されなければならない

(8)において『主語』とは、S(又はTP)に直接支配されたNPであり、意味的には、節内の動詞が表す行為の『動作者』(Agent)あるいは『主題』(Theme)といった意味役割を付与されている要素と考える。『束縛』に関しては、 α が β を『束縛』する場合、 α と β は同一の指示内容(同一のインデックス)を持ち、かつ

α が β を c 統御すると定義できる。⁵ 『局所的束縛』とは、束縛される要素を含む最小の節内で束縛がおこなわれることを意味している。⁶ この照応表現の束縛現象が間接受身文に適用されると、(9)に見られるように、与格名詞句が「自分」や「自分自身」の先行詞として解釈可能であることがわかる (Hoshi 1999、Kitagawa and Kuroda 1992、Washio 1990を参照)。

- (9) a. 太郎₁が花子₂に自分_{1/2}の部屋で煙草を吸われた
 b. 太郎₁が花子₂に自分自身_{*₁/2}の部屋で煙草を吸われた

(9a) では、主節の主語名詞句「太郎」だけでなく、与格名詞句「花子」も「自分」と同一の解釈を得ることが可能であり、与格名詞句が統語的に主語としてふるまうことがわかる。(9b) では与格名詞句のみが「自分自身」の先行詞として解釈され、主節の主語名詞句は「自分自身の」先行詞として解釈することが困難である。この事実は(9b)には埋め込み節が含まれており、その節を飛び越えて主節の主語名詞句が「自分自身」の先行詞として解釈できないとして説明することができる。したがって、(5)で示された4つの統語構造の可能性はいずれも(9)で観察されている照応表現のふるまいと合致している。(5)では全てが埋め込み節の構造を持っているという点で同じであり、与格名詞句が埋め込み節の主語としてそのまま表層に現われているのか (= (5a))、埋め込み節の主語位置に痕跡が残されているのか (= (5b))、PROがその位置を占め、与格名詞句にコントロールされているのか (= (5c))、あるいは pro がその位置を占め、与格名詞句と同一のインデックスを与えられているのか (= (5d))、という点において異なっているだけである。すなわち、埋め込み節内で照応表現の先行詞が音形のある名詞句なのか、それとも空範疇(痕跡、PRO、 pro)なのか、という違いだけである。間接受身文と同様に埋め込み文構造を持ち、与格名詞句が主語として機能する使役構文においても、照応表現の分布が同じであることがわかっている (Miyagawa 1999を参照)。

⁵ 『 c 統御』は以下のように定義できる。

(i) α を支配する最初の枝分かれ節点が β を支配し、 α と β がお互いを支配せず、かつ α と β が同一でない場合、 α が β を c 統御する。

⁶ 定義を含む『束縛』の包括的な議論に関しては、Chomsky 1981を参照されたい。

- (10) a. 太郎₁が花子₂に自分_{1/2}の部屋で煙草を吸わせた
 b. 太郎₁が花子₂に自分自身_{*1/2}の部屋で煙草を吸わせた

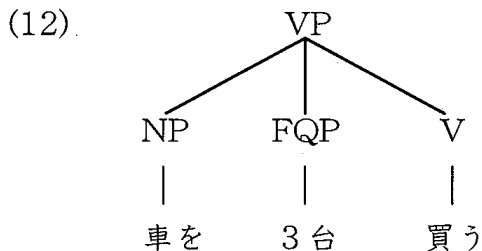
したがって、これらの照応表現の束縛に関する事実から、間接受身文が埋め込み節の構造を持ち、その主語位置は与格名詞句によって占められているか、あるいは与格名詞句と結びついた空範疇によって占められていると結論づけることができる。

3.2. 数量詞遊離

次に、数量詞の遊離現象について考えてみる。ここでは、Miyagawa (1989) の提案に従い、数量詞の遊離は数量詞が修飾する名詞句 (= NP) とは切り離されて基底生成されており、遊離数量詞とNPは『相互c統御制約』、すなわち、互いにc統御するという制約を満たしてなければならないと仮定する。(11) を例として考えてみる。

- (11) a. 私は [NP 3台の車を] 買った
 b. 私は [NP 車を] 3台買った

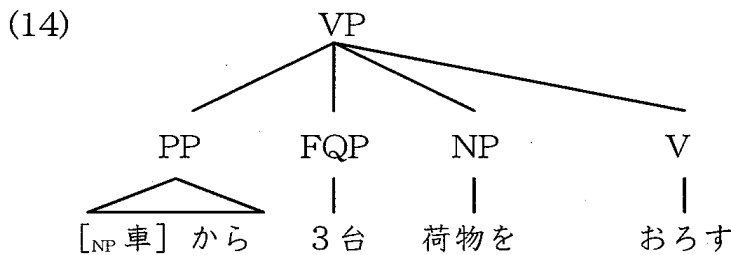
ここでは単純に、遊離した数量詞 (= Floating Quantifier Phrase: FQP) はVPに付加して三つ又構造を作ると仮定する。(11b) では、(12) に示したようにNP「車を」と遊離した数量詞「3台」が互いにc統御する関係になっており、遊離数量詞が認可されている。



しかしながら、FQPがPP内のNPと修飾関係を結ぶ場合、数量詞遊離において、PP内のNP「車」は(13)に示されているように、FQPと修飾関係を結ぶことができない。

- (13) a. 私は [PP 3台の車から] 荷物を降ろした
 b. *私は [PP 車から] 3台荷物を降ろした

(13b) の構造は (14) のように表示され、PP内のNPがFQPをc統御せず、したがって『相互c統御制約』を満たすことができないため非文になっていると説明することができる。



この数量詞遊離の統語テストも間接受身文に適用されている (Miyagawa 1989)。埋め込み節の与格名詞がPPではなく、述語の項、すなわちNPとしてふるまうならば、与格名詞句とFQPの間で『相互c統御制約』が満たされることになり、修飾関係が成立すると予測できる。実際、(15)に見られるように、その予測が正しいことがわかる。

- (15) a. 太郎は [3人の女子学生に] 高級フランス料理を注文された
 b. 太郎は [女子学生に] 3人高級フランス料理を注文された

(16) は数量詞遊離現象を使役構文に当てはめたものであるが、これも予測通り、与格名詞句とFQPが『相互c統御制約』を満たすことによって、修飾関係を結ぶことが保証され、(15)と同じ統語的ふるまいを示している。

- (16) a. 太郎は [3人の女子学生に] 高級フランス料理を注文させた
 b. 太郎は [女子学生に] 3人高級フランス料理を注文させた

したがって、数量詞遊離が認可されるという事実から、間接受身文における「NPに」の連鎖は主語名詞句として機能するという仮定とは矛盾せず、(5)で示した統語構造の分析と合致していることになる。(5)の統語構造にFQPを加えたものが(17)の表示である。

- (17) a. [_s NP-が [_s NP-に FQP NP-を V_t] - (ら) れ]
 b. [_s NP-が NP-に₁ [_s t₁ FQP NP-を V_t] - (ら) れ]
 c. [_s NP-が NP-に₁ [_s PRO₁ FQP NP-を V_t] - (ら) れ]
 d. [_s NP-が NP-に₁ [_s *pro*₁ FQP NP-を V_t] - (ら) れ]

(17a) では FQP と「NP に」が直接『相互 c 統御制約』を満たし、遊離数量詞が認可されている。(17b-d) では、FQP はそれぞれ、痕跡 (t)、PRO、*pro* と『相互 c 統御制約』を満たし、数量詞の遊離が可能であることを正しく捉えることができる。

3.3. 比較助詞「より」

しかしながら、以下では比較を表す助詞「より」を用いた統語テストを間接受身文に適用し、間接受身文における [NP に NP を V] の連鎖は構成素を成していないということを主張する。まずは (18) と (19) を考えてみたい。

- (18) a. 太郎は [_{VP} 花子に京都で会う] より [_{VP} 洋子に神戸で会い] たがっている
 b. *太郎は [_α 花子に京都で] より [_α 洋子に神戸で] 会いたがっている
- (19) a. 太郎は [_{VP} 花子にお金を渡す] より [_{VP} 洋子に手紙を渡し] たがっている
 b. *太郎は [_α 花子にお金を] より [_α 洋子に手紙を] 渡したがっている
 c. *太郎は [_α 花子にお金] より [_α 洋子に手紙] を渡したがっている

(18) と (19) に見られる文法性のコントラストは何に起因するのであろうか。違いは比較助詞「より」がどのような要素に付着しているのかということである。(18a) では、「より」が VP 全体に付着しており、文法的である。他方、(18b) では、 α で示した要素に「より」が付着することによって非文になっていると考えることができる。「花子に京都で」という連鎖は構成素として見なすことができない要素であるという事実に基づいて、McCawley and Momoi (1986) で指摘されているように、「より」は (20) の統語的条件を満たさなければならないと仮定する。

- (20) 比較助詞「より」が付着する要素は構成素でなければならない

(19) において観察されているコントラストも同じように説明することができる。(19b-c) の α で示した「花子にお金 (を)」という連鎖は構成素と見なすことができず、「より」がそのような非構成素に付着していることから非文になっている。比較助詞「より」は (21) に見られるように、VP 以外にもさまざまな種類の構成素に付着することができる。⁷

- (21) a. アキバ系アイドル歌手は [AP きれい] よりも [AP かわいらしい] かどうか
大切です
b. 勉強は [PP 家で] よりも [PP 図書館で] するほうがはかどります
c. [PP 神戸から] よりも [PP 京都から] のほうが断然便利です
d. 太郎は [PP 花子に] よりも [PP 洋子に] ラブレターを渡したがっている
e. 太郎は [NP お金] よりも [NP 名誉] を欲しがっている
f. 私は [ADVP ゆっくり] よりも [ADVP きっちり] 走りたい
g. 次郎は [S 太郎が花子にキスする] よりも [S ジョンが洋子をデートに
誘う] ほうが成功する確率が高いと思っている

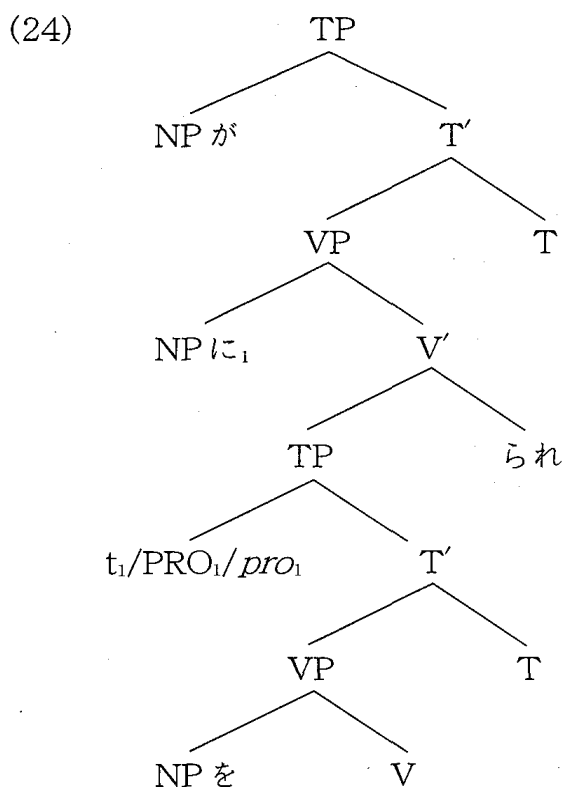
(20) の制約から、間接受身文における [NP に NP を V] の連鎖が構成素であるかどうか検証することができる。(22) の [] で示した連鎖に比較助詞「より」が付着すると、(23b) のような非文になってしまう。

- (22) 太郎が [花子に煙草を吸わ] れて困っている
(23) a. 太郎が [VP 花子に煙草を吸われる] より [VP 洋子に酒を飲まれ] て困っている
b. *太郎が [α 花子に煙草を吸う] より [α 洋子に酒を飲ま] れて困っている
c. 太郎が花子に [VP 煙草を吸う] より [VP 酒を飲ま] れて困っている

「(ら) れ」を含む主節の VP 全体に「より」が付着した (23a) と比較して、(23b) の非文法性は、比較助詞「より」が「花子に煙草を吸う」という連鎖に付着していることに起因する。したがって、(20) から、間接受身文において、「(ら) れ」が選択していると仮定していた [NP に NP を V] の連鎖は、実は構成素ではない

⁷ Arisaka et. al (1992) は比較助詞「より」の統語テストを用いて、「～てあげる」、「～てもらう」という述語が持つ統語構造について論じている。詳しい議論に関しては Arisaka et. al 1992 を参照されたい。

という結論になる。(23c) の適格性は、[NPに NPを V] の連鎖の内部にある [NPを V] という連鎖がVPという構成素を成していることを示している。⁸ 間接受身文の [NPに NPを V] という連鎖が構成素ではないという結論から、与格名詞句は埋め込み節の外側に位置していることになり、(5) に示した統語構造の可能性の中で、(5a) において仮定された『埋め込み節分析』が排除されることになる。間接受身文の構造は (24) のように表示できると仮定する。



次に明らかにしなければならないことは、与格名詞句が痕跡を残して埋め込み節の外側に移動したのか (= (5b))、それとも埋め込み節の外側に基底生成されているのか (= (5c-d)) ということである。

興味深いことに、使役構文において、比較助詞「より」を用いた統語テストを適用すると、間接受身文とは異なる結果が得られる。

⁸ 埋め込み節の動詞が自動詞であっても同じ結論を導くことができる。

(i) a. *太郎が [次郎に泣く] より [花子に死な] れて困っている
 b. 太郎が次郎に [泣く] より [死な] れて困っている

(25) 太郎が [花子に煙草を吸わ] せたがっている

(26) a. 太郎が [_{VP} 花子に煙草を吸わせる] より [_{VP} 洋子に酒を飲ませ] たがっている

b. 太郎が [_{TP} 花子に煙草を吸う] より [_{TP} 洋子に酒を飲ま] せたがっている

c. 太郎が花子に [_{VP} 煙草を吸う] より [_{VP} 酒を飲ま] せたがっている

(26a) では使役形態素「させ」を含む主節のVPに「より」が付着しており、(20)の制約に従っている。(26b) では「させ」によって埋め込まれた [NPにNPをV]の連鎖が「より」の付着対象になっているが、(26b) が文法的であるという事実から、この連鎖は構成素であり、全体が埋め込まれた不定節になっていると考えることができる。(26c) は (23c) 同様、最も深く埋め込まれたVPに「より」が付着し、文法的である。間接受身文とは異なり、使役構文の場合 [NPにNPをV]の連鎖は不定節のTPに対応しており、その構造は(27)のように表示できる。

(27) [_{TP} NPが [_{TP} NPにNPをV] -させ]

3.4. 『「す(る)」挿入』とVP前置

間接受身文の構造として、(5b-d)の中でどれが最も妥当であるかという問題に議論を移す前に、VP前置を統語テストとして用い、間接受身文における [NPにNPをV]の連鎖が構成素ではなく、与格名詞句が埋め込み節の外側に位置しているという主張をさらに検討してみたい。日本語では、時制範疇 (Tense) と動詞の間に副助詞の「さえ」、「も」、「は」などが挿入されると、「す(る)」という、それ自体は意味を担わない虚辞的な動詞が挿入されねばならず、英語のいわゆる『ダミー動詞』(do)の挿入と類似した現象が生じる。⁹

(28) a. 太郎が花子の息子を殴った

b. 太郎が花子の息子を殴り さえ／も／は した

動詞「殴(る)」と過去を示す時制要素「た」の間に副助詞が挿入されることによ

⁹ 日本語の『「す(る)」挿入』に関する包括的な議論としてはOhkado 1991を参照されたい。「する」・「殴る」はそれぞれ形態的に「し」(又は「さ」)・「殴り」に活用変化するが、統語的なカテゴリーや構成素に関しては何も影響を与えていないと仮定する。

り、「た」は動詞と切り離されてしまう。(28b)における「す(る)」の挿入は、「た」が屈折接辞として機能し、何らかの動詞的要素と隣接して接合しなければならないという要請から生じていると説明することができる。『「す(る)」挿入』が適用されなければ、(29)のような非文になってしまう。

(29) *太郎が花子の息子を殴りさえ／も／はた

(28b)のように、「す(る)」が挿入された環境で、副助詞を含んだVP全体を前置することができる。¹⁰

(30) [VP 花子の息子を殴りさえ] 太郎が t_{VP} した

前置される要素は構成素でなければならないということを前提に、『「す(る)」挿入』とVP前置を間接受身文に適用してみる。まず、(31)のような間接受身文に対して2通りの『「す(る)」挿入』が可能であることがわかる。

(31) 次郎が太郎に花子の息子を殴られた

(32) a. 次郎が太郎に花子の息子を殴りさえされた

b. 次郎が太郎に花子の息子を殴られさえした

(32a)では、「さえ」が動詞「殴(る)」と受身形態素「(ら)れ」の間に挿入されている。「(ら)れ」は動詞であると同時に、時制要素と同様、屈折接辞的な性質を持っており、『「す(る)」挿入』の適用を必要とする。したがって、(29)と同様、『「す(る)」挿入』が適用されない場合、(33)のような非文になってしまう。

(33) *次郎が太郎に花子の息子を殴りさえ(ら)れた

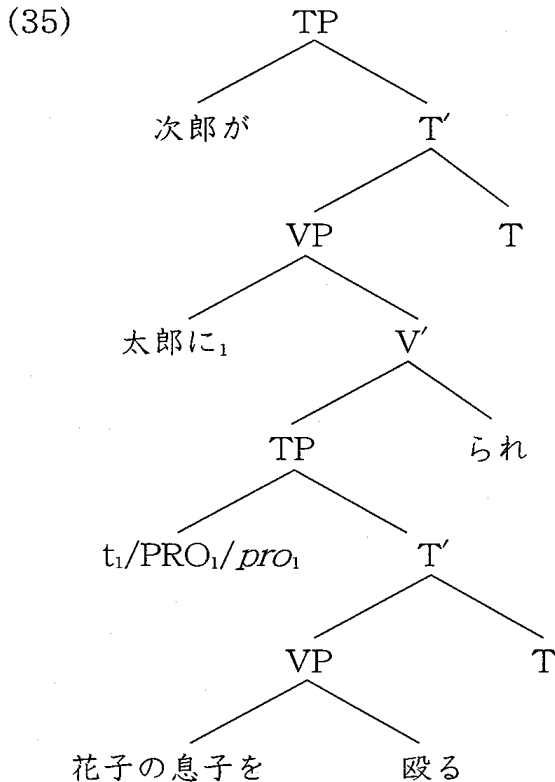
(32b)では、「殴(る)」+「(ら)れ」の連鎖(「殴られ」と時制要素「た」の間に副助詞「さえ」が挿入され、時制要素「た」が屈折接辞として接合する動詞

¹⁰ 以下では、紙面の都合上、「さえ」という副助詞を含んだ例文のみを考察の対象とする。

的要素が必要となり、「す(る)」が挿入されている。(32b)においても、『「す(る)」挿入』が適用されなければ、(34)のように非文が生じてしまう。

(34) *次郎が太郎に花子の息子を殴られさえた

(32a-b) の『「す(る)」挿入』の適用を受けた間接受身文にVP前置を適用するが、どの連鎖に適用することが可能なのかに関して、それぞれ2通りのパターンを比較する。2通りのパターンとは、1つは与格名詞句を含む主節のVPを前置したものと、もう1つは与格名詞句が除外されている、深く埋め込まれたVPを前置したものである。(24)の間接受身文の抽象的な構造から、(31)の句構造標識は(35)のように表示することができる。”



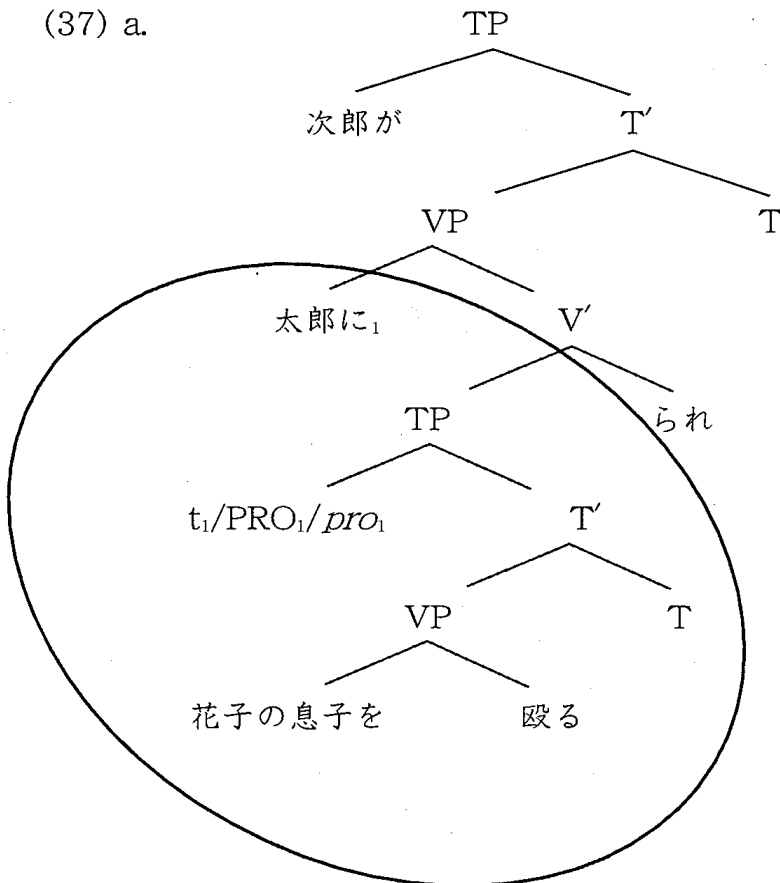
” (35) では、NP「太郎」は痕跡を残し、VPに直接支配された位置に移動して与格を付与（または照合）されているか、または基底でその位置に生成され、与格を付与（または照合）されていると仮定しておく。照合理論（Checking Theory）を仮定するならば、VPという語彙範疇ではなく、例えばvpのような機能範疇を仮定しなければならないが（Chomsky 1995を参照）、VPであっても、機能範疇を導入しても、ここでの議論には何ら影響しないため、VPという語彙範疇をそのまま仮定しておくことにする。

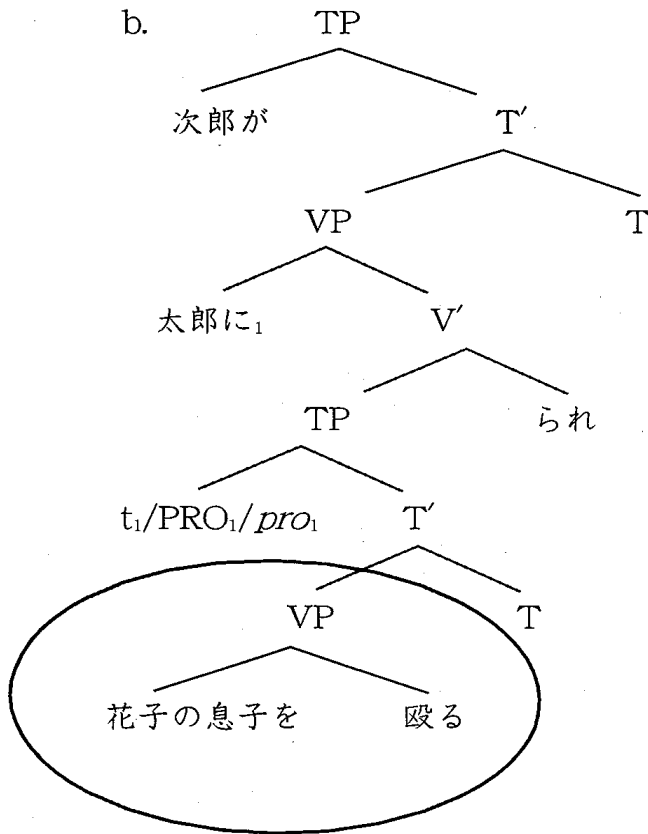
(35) の構造を踏まえ、まずは、(32a) の『「す(る)」挿入』にVP前置が適用された2つのパターンを考察する。与格名詞句を含む「太郎に 花子の息子を 殴り(さえ)」の連鎖が前置された場合には、その連鎖は構成素になりえず、非文となり、他方、与格名詞句を除く「花子の息子を 殴り(さえ)」の連鎖はVPと見なすことが可能であり、前置された場合、適格な文になることが予測される。実際に、(36) に見られるコントラストから予測の正しさがわかる。

- (36) a. * [太郎に花子の息子を殴りさえ]、次郎がされた
 b. ? [花子の息子を殴りさえ]、次郎が太郎にされた

(36) において、前置された部分は (37) の句構造標識の中で○で囲んである部分にそれぞれ対応している (但し「さえ」は除いてある)。

(37) a.





(37a) の○で囲んである部分「太郎に花子の息子を殴る」は主節のVPの一部であり構成素ではなく、(36a) の非文法性が正しく説明できる。他方、(37b) の○で囲んである部分「花子の息子を殴る」は空範疇を含んでいなければVPとみなされ、前置することが許されることになる。¹² したがって、[NPに NPを V] の前置の非文法性から、この連鎖が構成素を成しておらず、与格名詞句が埋め込み節の外側に生成されていると結論づけることができる。

3.5. 前置における適性束縛条件と投射の可視性条件

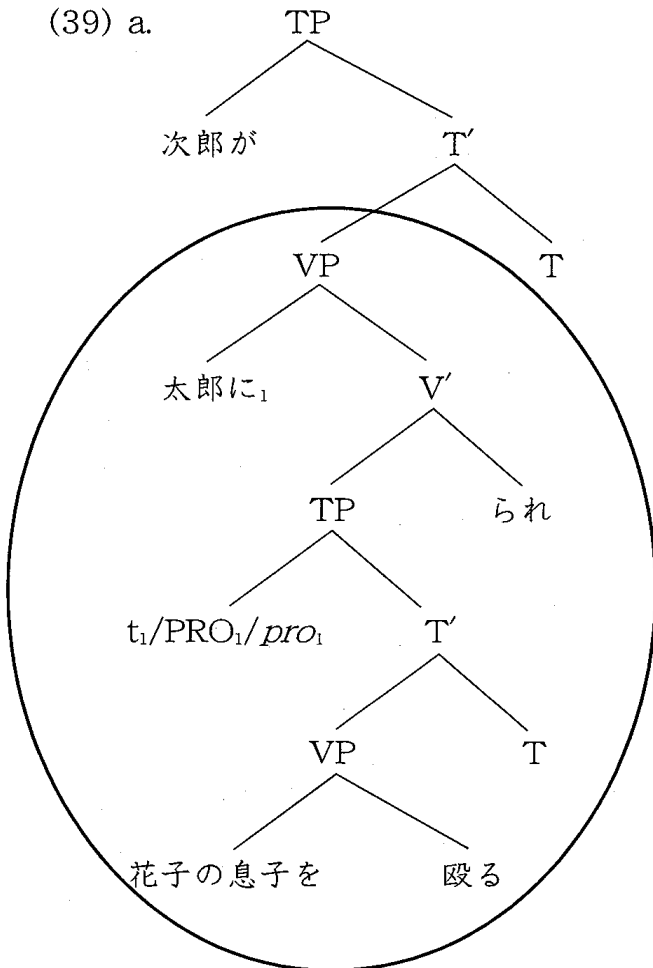
前節では、(32a) において『「す(る)」挿入』されたVPを前置する統語テストを用いて、間接受身文 [NPに NPを V] の連鎖が構成素ではないことを確認した。次に、(32b) の『「す(る)」挿入』にVP前置が適用された2つのパターンを考察

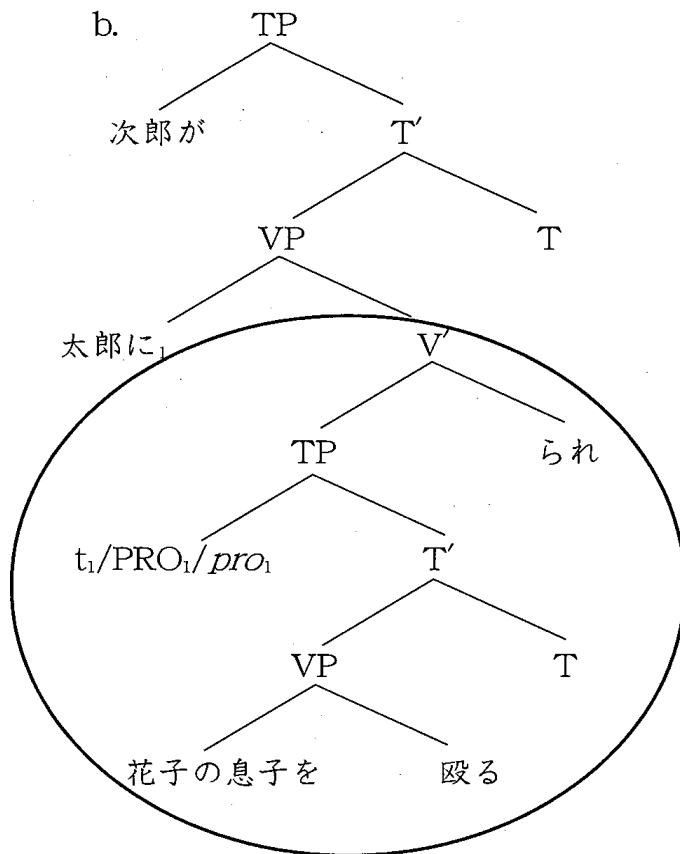
¹² (37b)において音形のない非定形のT及びTPの指定部の要素(t/PRP/pro)を含むTP全体が動いていると考えることもできる。実際に、使役構文の前置では、TP全体が移動していると思えることが可能である。脚註14を参照されたい。

する。(36) とは異なり、(38) では与格名詞句を含んだ連鎖の前置が適格文になり、逆に与格名詞句を除外した連鎖の前置が非文になってしまう。

- (38) a. ? [太郎に花子の息子を殴られ] さえ、次郎がした
 b. * [花子の息子を殴られさえ]、太郎が次郎にした

(38) で前置されている部分は (39) の句構造標識において○で囲んである部分と一致している (但し「さえ」は除いてある)。(39a) は (38a) に、(39b) は (38b) にそれぞれ対応している。





(39a) の句構造標識において、「太郎に花子の息子を殴られ」という連鎖全体は主節の VP と見なすことが可能であり、(38a) の適格性を正しく捉えることができる。(39b) に関しては、(37a) とは異なり、○で囲まれている部分は1つのまとまりになっており、構成素ではないと主張するのは困難であるように思われる。では、(38b) の不適格性の要因は何であろうか。(38b) の空範疇が痕跡であるならば、『適性束縛条件』(Proper Binding Condition: 以下 PBC とする) に違反している可能性がある。『「に」繰り上げ分析』では、与格名詞句「太郎に」は、もともと「太郎」という格を付与されていない名詞句が埋め込み節内の主語位置 (TP の指定部) に基底生成され、移動変換規則の適用により、痕跡を残して埋め込み節の外に移動すると仮定していた。○で囲んだ部分が移動した与格名詞句を越えて前置される場合、○で囲んだ部分に含まれている痕跡は先行詞に c 統御されず、PBC の違反を引き起こすことになる。

(40) PBC: 痕跡は派生の段階で常に c 統御されていなければならない

しかしながら、ここで注意しなければならないことは、残された痕跡の性質である。与格名詞句が埋め込み節内の元位置から VP に支配された位置に移動する際、その移動が格付与（または格照合）によって生じたものであるならば、元位置に残された痕跡は A 束縛された痕跡ということになる。VP 内主語仮説に基づき (Fukui 1986, Kuroda 1988 を参照)、英語では、NP が VP 内から TP の指定部に格付与のため（又は EPP を満たすため）A 移動をおこない、NP の痕跡は A 束縛されている。移動した NP を越えて VP が前置されるのであれば、VP 内に残されている NP の痕跡は束縛されず、PBC の違反を引き起こすことになるが、(41) の VP 前置の適格性から、NP 移動の痕跡は表層構造で先行詞に c 統御される必要がないとしなければならない。

(41) John wanted to eat the pizza yesterday and [_{VP} t_i eat the pizza]
he_i actually did t_{VP}.

したがって、A 束縛された痕跡は PBC の制約を受けないという結論になる。確かに、日本語のかきまぜ現象においては (42c) のように PBC 効果が現われるが、(42b) の節を越えてのかきまぜ規則の適用は A' 移動であると見なされ (Saito 1992)、A' 束縛された痕跡は PBC の制約に従わなければならない。

- (42) a. 太郎が [次郎が花子に電話したと] 信じている
b. 太郎が 花子に₁ [次郎が t_i 電話したと] 信じている
c. * [次郎が t_i 電話したと]₂ 太郎が 花子に₁ t₂ 信じている

PBC 違反の可能性は消滅したが、(38b) の非文法性を説明するもう 1 つの可能性が残っている。(39b) の構造からも明らかなように、前置されている要素が最大投射ではなく、V' であることが非文法性に由来すると主張することができる。Chomsky (1986) で議論されているように、移動において可視的な (visible) 要素は最大投射 (X'') と主要部 (X⁰) であるという主張が正しければ、X' レベルの構成素は移動の適用を受けないということになる。

(43) 移動の可視性条件：最大投射と主要部範疇のみが移動において可視的である

いずれにしても、これまでに観察してきた VP 前置の適格性や非文法性から、間接受身文に仮定された統語構造 (= (24)) の妥当性が実証され、間接受身文における [NP に NP を V] の連鎖が構成素ではないということがわかった。以上のことから、間接受身文の構造は以下の 3 つに絞られることになる。^{13, 14}

- (44) a. [_S NP-が NP-に₁ [_S t₁ NP-を V_i] -られ]
 b. [_S NP-が NP-に₁ [_S PRO₁ NP-を V_i] -られ]
 c. [_S NP-が NP-に₁ [_S pro₁ NP-を V_i] -られ]

3.6. *pro* と代名詞の分布

(44) の中から、どのようにして最も妥当な間接受身文の構造を選び出すことができるのであろうか。まずは、埋め込み節内の空範疇が *pro* であるという可能性を排除したい。*pro* は PRO と同様に音形のない要素であるが、PRO とは異なり、[+pronominal]、[-anaphor] という素性を指定されている代名詞である。したがって、*pro* が生起している場合、音形のある名詞句との交替が可能であると予測できる。例えば、日本語は、代名詞省略言語 (*Pro-drop language*) であり、(45) に見られるように、主節の主語名詞句と同一のインデックスを持つ *pro* が埋め込み節の主語位置を占めていると考えることができる。

- (45) [_{TP} 太郎₁が [_{CP} *pro*₁ 花子を愛していると] 言った]

¹³ 埋め込み節に自動詞を含む間接受身文においても、VP 前置に関して同じ統語的ふるまいを示す。

- (i) a. 太郎が [花子に泣きさえ] された
 b. * [花子に泣きさえ] 太郎がされた
 c. ? [_{VP} 泣きさえ] 太郎が花子にされた
 (ii) a. 太郎が [_{VP} 花子に [_V 泣かれさえ]] した
 b. [_{VP} 花子に泣かれさえ] 太郎がした
 c. * [_V 泣かれさえ] 太郎が花子にした

¹⁴ しかしながら、使役構文における前置については、間接受身文とは異なるコントラストが得られるように思われる。以下では、VP だけでなく TP も前置できると仮定する。

- (i) a. 次郎が [_{TP} 太郎に [_{VP} 花子の息子を殴り] さえ] させた
 b. ? [_{TP} 太郎に [_{VP} 花子の息子を殴り] さえ] 次郎がさせた
 c. [_{VP} 花子の息子を殴りさえ] 次郎が太郎にさせた
 (ii) a. 次郎が [_{VP} 太郎に花子の息子を殴らせさえ] した
 b. [_{VP} 太郎に花子の息子を殴らせさえ] 次郎がした
 c. * [花子の息子を殴らせさえ] 次郎が太郎にした

この違いは、(27) で議論したように、使役構文における [NP に NP を V] の連鎖が構成素 (TP) を成していることによる。したがって、(ic)とは異なり、(iic) では構成素の一部である与格名詞句を除外して前置することになり、非文になってしまう。

*pro*は音形が与えられていないものの、範疇としては代名詞であり、格を与えられ、認可される要素であると仮定できる。*pro*の生起している位置は埋め込まれた定形節の主語位置であり、予測としては主格を伴う名詞的要素が生起できることになる。実際に予測通り、(46)に見られるように、*pro*の代わりに音形を持つ代名詞が生起可能であり、先行詞である主節の主語と同一の解釈を持つことができる。代名詞は、埋め込み節内でA束縛されておらず、自由であり、束縛条件Bに違反していない。

(46) [TP 太郎₁が [CP 彼₁が花子を愛していると] 言った]

しかしながら、間接受身文の場合、このような代名詞的要素との交替が不可能であることが以下の例からわかる。

(47) 次郎が太郎₁に [TP *pro*₁ 花子の息子を殴ら] れた

(48) *次郎が太郎₁に [TP 彼₁が／に／を 花子の息子を殴ら] れた

(48)において、代名詞「彼」は埋め込み節内に生起しており、(46)と同様に束縛条件Bには違反していない。*pro*の代わりに音形を持つ代名詞が生起できないという事実から、間接受身文の埋め込み節内の主語は格を与えられる位置ではなく、*pro*が占めることはできないということになる。そうすると、この位置はNP移動によって残された痕跡か、与格名詞句によってコントロールされたPROが占めているということになり、どちらが正しいのか、ということが問題になる。

4. まとめ：コントロールかNP移動か？

最終的に、我々は、(49)のどちらか一方が間接受身文の構造として適切なものであるという結論に辿り着いた。

(49) a. [_s NP-が NP-に₁ [_s t₁ NP-を V_i] -られ]

b. [_s NP-が NP-に₁ [_s PRO₁ NP-を V_i] -られ]

Hornstein (1999) は、義務的コントロール構文ではPROが存在せず、元々PROが存在すると仮定されていた位置にはNPが基底生成されており、その位置で埋め込

み節の動詞の意味役割に関わる素性 (θ 素性) を照合し、そこから主節の VP 指定部を経て動詞の θ 素性を照合し、最終的には TP の指定部へ移動することによって表層の構造が得られると論じている。¹⁵

(50) [_{TP} John_i [_{VP} t_i [_V tried [_{CP} [_{TP} t_i to [_{VP} t_i win]]]]]

したがって、Hornstein (1999) による分析が正しければ、(49a) と (49b) のどちらが正しいのかという問題は意味を成さないことになる。すなわち、間接受身文は (49a) のように派生していることになり、コントロールという概念は不要ということになる。確かに、PRO という要素を文法モデルから除外するという試みは興味深いものであるが、日本語の間接受身文が本当に (49a) のように派生しているのかどうかに関して注意深く議論する必要があるように思われる。例えば、以下の文について考えてみたい。

- (51) a. 太郎が花子にふられた
b. 太郎が花子によってふられた

- (52) a. 太郎が花子に泣かれた
b. *太郎が花子によって泣かれた

直接受身文の場合、(51) のように、「NPに」の「に」が「によって」と交替することが可能であるが、自動詞を含む間接受身文の場合、(52) からわかるように、「NPに」の「に」が「によって」に交替することは不可能である。¹⁶ しかしながら、(53b) に見られるように、他動詞を含む間接受身文の場合、「に」と「によって」の交替が可能であるように思われる。¹⁷

¹⁵ Hornstein (1999) の主張を巡って様々な反論や反論に対する議論が展開されている。例えば、Boeckx and Hornstein 2003, 2004, Culicover and Jackendoff 2001, Landau 2003, Polinsky and Potsdam 2002を参照されたい。

¹⁶ 実際には、「に」と「によって」の交替ではなく、それぞれが別の構造を持つ2種類の受身文であるという可能性を考慮しなければならない。直接受身文（「に」受身文）と「によって」受身文の違いに関する議論についてはHoshi 1999を参照されたい。

¹⁷ 埋め込み節に自動詞を含む間接受身文と他動詞を含む間接受身文におけるこの差異をどのように扱うべきなのかについてはここでは論じない。

- (53) a. 太郎が何者かに自分の息子を誘拐された
 b. 太郎が何者かによって自分の息子を誘拐された

「によって」の場合、数量詞遊離が認可されないことからその範疇はPPであるとわかる。

- (54) a. 太郎は [PP 3人の女子学生によって] 高級フランス料理を注文された
 b. *太郎は [PP 女子学生によって] 3人高級フランス料理を注文された

他動詞を含む間接受身文において、「NPに」と「NPによって」の違いが単に範疇がNPかPPであり、基本的な統語構造においては同一である、と仮定した場合、Hornstein (1999) の分析と相容れることができるのだろうか。PROではなくNP移動が生じた場合、拡張条件 (Extension Condition) を満たすのであれば、併合のターゲットはルート (階層構造の最上位) でなければならず、移動の対象となるNPが複製され (Copy)、PPをターゲットとして併合し (Merge)、その後PPとVPが併合され、最終的にPFで複製されたNPを消去する (Delete) という派生のプロセス (sideward movement) を経て生成されることになる (Hornstein 1999参照)。

- (55) i. 併合 ([_{TP} NP₁ NPをV_i], られ) ⇒ [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ]
 ii. 複製NP₁
 iii. 併合 (NP₁ , [_{PP} によって]) ⇒ [_{PP} NP₁ [_P によって]]
 iv. 併合 ([_{PP} NP₁ [_P によって], [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ])
 ⇒ [_{VP} [_{PP} NP₁ [_P によって]] [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ]
 v. 併合 ([_T た], [_{VP} [_{PP} NP₁ [_P によって]] [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ])
 ⇒ [_{TP} [_{VP} [_{PP} NP₁ [_P によって]] [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ]] た]
 vi. 併合 (NPが, [_{TP} [_{VP} [_{PP} NP₁ [_P によって]]] [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ]) た])
 ⇒ [_{TP} NPが [_T [_{VP} [_{PP} NP₁ [_P によって]]] [_{VP} [_{TP} NP₁ NPをV_i] -られ]] た]]
 vii. 複製されたNPの消去 (PFでの操作)
 ⇒ [_{TP} NPが [_T [_{VP} [_{PP} NP₁ [_P によって]]] [_{VP} [_{TP} ~~NP₁~~ NPをV_i] -られ]] た]]

この分析が妥当であるか考えるためには、このようなsideward movementが可能であるかどうか (Nunes 2004を参照) ということを議論しなければならない。日本語におけるSideward movement仮説の検証には、間接受身文以外の言語データに

についても検討が必要となるため、ここでは、これ以上論じることはできないが、日本語の間接受身文における与格名詞句の統語的性質を吟味することから、計算システムにおいて、PROを仮定することなく、どのようにコントロールの効果を捉えることができるのか、解決する手がかりになることが期待できるように思われる。

参考文献：

- Abe, Jun. 1993. *Binding conditions and scrambling without A/A' distinction*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Arisaka, Kenji, Shinsuke Homma, Hidehito Hoshi, Mikinari Matsuoka, and Kazue Takeda. 1992. Control and *Te*-Clauses in Japanese. *Tsukuba English Studies* 11: 231-278.
- Boeckx, Cedric and Norbert Hornstein. 2003. Reply to "Control is Not Movement". *Linguistic Inquiry* 34: 269-280.
- Boeckx, Cedric and Norbert Hornstein. 2004. Movement under Control. *Linguistic Inquiry* 35: 431-452.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*. Foris.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. MIT Press.
- Culicover, Peter and Ray Jackendoff. 2001. Control is not movement. *Linguistic Inquiry* 32: 493-512.
- Fukui, Naoki. 1986. *A theory of category projection and its applications*. Doctoral dissertation, MIT.
- Hornstein, Norbert. 1999. Movement and Control. *Linguistic Inquiry* 30:69-96.
- Hoshi, Hiroto. 1999. Passives. In Natsuko Tsujimura (ed.), *The handbook of Japanese linguistics*, 191-235. Blackwell.
- Howard, Irvin. and Agnes M. Niyekawa-Howard. 1976. Passivization. In Masayoshi Shibatani (ed.), *Japanese generative grammar, Syntax and semantics* 5: 201-238, Academic Press.
- Katada, Fusa. 1991. The LF representation of anaphors. *Linguistic Inquiry* 22: 287-314.
- Kitagawa, Yoshihisa. and S.-Y. Kuroda. 1992. Passive in Japanese. Ms., Indiana University and UC San Diego.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. 1965. *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, S.-Y. 1978. Case-marking, canonical sentence patterns and counter Equi in Japanese (A preliminary survey). In John Hinds and Irwin Howard (eds.), *Problems in Japanese syntax and semantics*, 30-51. Kaitakusha.
- Kuroda, S.-Y. 1979. On Japanese Passives. In George Bedell, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki (eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 305-347. Kenkyusha.
- Kuroda, S.-Y. 1988. Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticæ Investigationes* 12: 1-47.
- Landau, Idan. 2003. Movement out of control. *Linguistic Inquiry* 34: 471-498.

- Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and Case marking in Japanese: Syntax and semantics* 22. Academic Press.
- Miyagawa, Shigeru. 1999. Causatives. In Natsuko Tsujimura (ed.), *The handbook of Japanese linguistics*, 236-268. Blackwell.
- McCawley, D. James and Katsuhiko Momoi. 1986. The constituent structure of *-te* complements. *Papers in Japanese Linguistics* 11: 1-61.
- Nunes, Jairo. 2004. *Linearization of chains and sideward movement*. MIT Press.
- Ohkado, Masayuki. 1991. A note on *suru* in Japanese. *Linguistic Analysis* 21: 148-169.
- Polinsky, Maria. and Eric Potsdam. 2002. Backward Control. *Linguistic Inquiry* 33: 245-282.
- Saito, Mamoru. 1992. Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 69-118.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』. 大修館書店.
- Washio, Ryuichi. 1990. The Japanese passive. *The Linguistic Review* 6: 227-263.